紫陽花（本坂谷）

うたごよみ　～文月～

米納三雄 選

【短歌】

雨後のここち良き風眼に青葉光るくもの巣花咲く菖蒲　赤星　延子

聞いたこと忘れてしまう夫が居てまたその妻も記憶あいまい　塚原　暁益

立夏とう暦に刺激受けたるか真夏日となり庭の華やぐ　本田冨美子

「おひさま」のテレビ番組若き日の我の姿を重ね見て居り　松本ぬい子

節毎に白き粉残し若竹はすくすく伸びる甘き香のせて　森田　房恵

廃屋の庭にぬくぬく昼寝する老いたる猫よ主のごとし　内田乃武子

庭に立つ梅の青き実今年もまた数多漬けたり感謝をしつつ　井上ユリ子

釣鐘のごとき花つけ真白なる鈴蘭あまた吾が庭に咲く　上村　かず

早々と夏日となれる春日和一匹の蚊も煩わしきかな　吉永由紀子

生い茂る庭の花木の剪定を今年も頼も初夏を迎えて　上村やす美

言わずともよきこと言いて悔みおり見上ぐる窓に雨雲低く　内山タミエ

山菜の次には梅の季節にて漬け込み終えて恵みに感謝す　緒方　明美

恥じ深きこの世と成るか吾れ八十路顧みて悔いることのみ多し　渡辺　幸士

【川柳】

【梅雨】

梅雨に入り独り暮らしのかび増える　林　雅之

復興の町には要らぬ梅雨の雨　布田　愛子

雨の日は紫陽花の絵手紙に　古閑チヨミ

梅雨晴れ間物干し忙し二度転ぶ　伊豆野ヤエ

雨だれワルツ田植え・紫陽花・五七五　北　仁子

【愚痴】

ついついと思わぬ愚痴も出てしまう　道上キヌ子

さまざまの愚痴をこぼして母を待つ　早　彦喜

一言の意見にボソボソ愚痴・小言　丸岡はる子

負けず嫌い気も短くて愚痴も出る　緒方　瑞枝

独り者どうしと猫に愚痴を言う　成松　松枝

天界の妻には愚痴も届かない　渡辺　幸士

【俳句】

柿若葉故里の庭懐しく　堀田　孝恵

子ら多かりしあの頃思う母子草　田端　慶子

白壁の倉に出入りの夏つばめ　本田　信子

帰り着き我が家一番花疲れ　古田　幸子

若葉風碁盤を囲む大広間　高田れい子

春ゆかす氣負うことなく棲み古りて　楠本　美鶴

■お問い合わせ先　町教育委員会公民館事務局
TEL 096-234-1111（内線321）

ひとの動き（敬称略）
3月11日(金)～4月10日(日)

birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
中横田	尾形 春樹（はるき）	男	暁 兵
芝原	清田 惺恋（せれん）	女	真太郎
緑町	大塚 天鯉（てんり）	男	史 博
横田	上野 脩人（しゅうと）	男	将 司
下横田	大河 遥音（はると）	男	準 也
船津	山下 結月（ゆづき）	女	健 二
西原	東 穣生（じょう）	男	誠二郎
田口	谷口 海斗（かいと）	男	智 之
仁田子	成松 蒼心（そうし）	男	久

marriage ご結婚おめでとう

	住所	氏名
夫	熊本市	横林 正秀
妻	仁田子	佐藤 春菜
夫	天草市	長谷部俊之
妻	船津	森田恵梨香
夫	東寒野	吉野 健太
妻	八代市	上本 真由
夫	下横田	白石 光彦
妻	宇土市	渡邊 ゆか
夫	津志田	菊谷 剛史
妻	津志田	宮田めぐみ
夫	上早川	本田 雄一
妻	仁田子	藤本真寿美
夫	船津	日隈 豊実
妻	玉名市	戸田 好美
夫	芦北町	垣本 尚徳
妻	糸田	田上 泉
夫	熊本市	椛木 史雄
妻	府領	志垣 幸

condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
仁田子	松井 正美	91	一 博
下横田	内村 邦夫	88	郁 子
中横田	徳永 友治	72	勇 治
白旗	上村 濃	87	敦 之
上揚	中村ツルコ	92	ツルコ
船津	稲葉ヨシメ	81	ヨシメ
田口	松本シゲコ	94	シゲコ
麻生原	松村 睦子	73	明 雄
緑町	甲斐 敬市	91	敬 直
早川	楠原タミ子	90	祐 子
岩下	西 トキエ	93	トキエ
田口	宮﨑 哲哉	81	平

Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,402	△4
女	6,089	△7
計	11,491	△11
世帯数	4,189	△4

平成23年5月31日現在

〔町史編さんだより〕

甲佐の歴史を紡いで
～町史編さんだより(33)～

緑川水運の発展

町史編集委員 花岡 興史（近世）

江戸時代の緑川は、多くの物資を終着点である川尻に運ぶ手段として欠くことができない存在でした。甲佐手永は中流域に当たり、上流には砥用手永、矢部手永があり、それぞれの手永の連関の中で、緑川は重要な役目を果たしてきました。今回は、緑川と手永の関係をお話しします。

緑川を遡っていくと、甲佐を境にその地形は激変します。勾配は急で水量は少なく、岩肌も露わになる印象です。これらは、そのまま水運の困難さも現しています。江戸時代には、緑川水運の確保について、中上流域は川を浚(さら)うことによりなされています。

これに関しては、熊本大学の吉村豊雄氏が詳細な研究をされています。今回は、その一端をご紹介しましょう。

緑川が重要な役割を果たしたの江戸時代の水運

緑川舟運を本格的に確立する契機となったのは、1850年代の通潤橋の完成です。矢部に白糸台地という大規模水田が成立し、にわかに緑川水運に対する期待を再燃させます。既に、1800年ごろにも川浚えは行われており、砥用手永まで水運は確保されます。その後、元治元(1864)年、本格的な川浚えが上流の矢部手永まで完成します。緑川の川浚いが行われたことは、水運による物流の活性化を生むようになり、この意義を慶応元(1865)年に甲佐手永惣庄屋の井上甚之助は、木材の一本流しが「筏(いかだ)組」になり、牛馬で駄送されていた木炭が、急流を下り鵜ノ瀬堰(ぜき)で積み替え、俵数を増やして河口に向かえると述べています。

従来、矢部手永の年貢米は、甲佐手永坂谷村まで陸路駄送し、鵜ノ瀬堰で船に積み直し、甲佐手永にある米蔵を借用し、上豊内で船を雇い川尻に向かっていました。しかし、川浚えが完成後は、矢部手永は、独自に上豊内に「中カ出蔵」を持つようになります。

江戸時代最末期に緑川水運は完成しますが、これを可能にしたのは、甲佐・砥用・矢部各手永の協力体制があったことが最大の理由でしょう。

▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先
町社会教育課町史編纂係
☎096-234-3310

編集後記

早いもので、大震災が発生してからおよそ4か月。

連日連夜、マスメディアからあふれ出ていた大震災の情報は鎮静化した感があるものの、被災地の困難さは変わらず、一日も早い復旧復興を願うばかり。

被震地の苦しみは、熊本からは想像の域を超えることはないが、現地で支援に携わる町職員らの肉声は、改めてその重大さと危機管理の重要性を問題提起。

大震災を境にして迫られている、防災に関しての考え方や基準、感覚についての根本的な発想の転換。安全の価値をどれだけ算定できるかが、今後の世界観の柱の一つとなる時代。

しかし、熊本では、梅雨や台風などの大きな自然災害に見舞われる可能性が一年で一番高い季節は、今からが本番。まずは、災害への準備と対策が万全かを確認することを最優先に。（と）